

二〇二四年度

帰国生入学試験

【基礎学力検査】

「国語」問題

1. 問題および解答用紙は試験開始の合図があるまで開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の所定の欄に記入してください。
3. 受験番号および氏名は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 試験終了後、解答用紙を問題の上に入れて置いてください。
5. 回収するのは解答用紙だけです。問題は持ち帰ってください。
6. 「国語」の問題は1ページから6ページまでです。

問題は次頁から

1 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

たとえば「シューベルト」という文字があるとします。大部分の人々はこれを文字どおり読むでしょうが、ごくわずかの人は読み間違えるかもしれません。「シートベルト」など。この間違いはどのように生じるのでしょうか。視力の弱い人が、文字を読みそこなうことが考えられます。しかし、視力とは関係なく、うっかりと読み間違いが起きもするのです。この「うっかり」はどこから生じるのでしょうか。そこから認識のメカニズムを垣間見ることが出来るかもしれません。

もしわたしたちが単語を構成している文字をひとつひとつ読んでいたら、読み間違いは生じないでしょう。「シ」「ユ」「ー」「ベ」「ル」「ト」と、ひと文字ずつ確認していれば、「シ」「ー」「ト」「ベ」「ル」「ト」とは読まないはずですが、⁽¹⁾読み間違いは、「読んでいない」ことに起因することになります。本当のところ、わたしたちは本を「読む」^(a)とシヨウして、その実「読んでいない」のかもしれませんが。そしてそこから認識のほころびが生じるのです。

では文字を読む時に、実際には何が起きているのでしょうか。どのように「間違い」は起きたのでしょうか。「シューベルト」を「シートベルト」と読み間違えることがあるとしたら、その理由は、明らかに、二つの言葉が視覚的に似ているからです。そこで、こういう推測が成り立ちます。わたしたちは文字のひとつひとつを「読んでいる」のではなく、ただ「見ている」のだ、と。すなわち「シューベルト」という単語を見ているのです。さらにいえば、単語を形成しているひとつひとつの文字ではなく、あくまでも全体の「形」を見て、判断しているのです。だからこそ、「シートベルト」という、「形」のよく似た単語との読み間違いが生じるのです。「シ」という単語の頭に、「ー」、それに「ベルト」はまったく同じであり、全体として、両者はあまりによく似ています。重要なのはあくまでも形なのであり、そのために、外見上似たものと混同することがあるのです。とり違えはこうしたつまずきから生じると考えられます。

こうして認識は「形の看取」から始まることとなります。⁽²⁾物の本質を表すギリシャ語の「アイデア」は、「見る」を意味する動詞イデーニ*idein*に由来し、本来は「見られたもの」「形」を表すことが思い浮かびます。

上記の読み間違いの例は、さらに重要な地点へとわたしたちを導きます。誤認は「シューベルト」という情報をわたしのなかにある「シートベルト」という知識と関連づけてしまったことであつたのです。とり違えは見誤りにあつたというより、むしろ誤つた「関連づけ」にあつたのです。「シューベルト」という語の形を見て、わたしのなかの「シューベルト」(それも「形」で収納されている)と符合させていれば、問題はなかつたのです。

すなわち、認識とは「AをBと照らし合わせること」となります。

誤認はこの「照らし合わせ」の手続きの段階で、誤りが生じたことから起きると考えることができます。だからこんなことも起きます。文章を読んでいて、まったく知らない言

葉が出てくると、面くらいます。「何だこれ」と、目を(b)ゴらすことさえあります。たとえば初めての英単語に出くわすと、アルファベットをひとつひとつ読んでみたりもするでしょう。知っている単語だったら、形を見るだけで判別できたのに、です。こうして、知らない言葉に出会うと、特別な困難が生じることになります。これはわたしたちが実際は読んではいないこと、形で判断しているために、未知のものには対応できないことの例証でもあります。

別のいい方をしましょう。ここでの困難さは「照合」すべきものがなかったことを意味するに違いありません。とり違えは「誤ったものと符合させてしまったこと」に起因したのですが、まったく新しい情報と出会うと、「符合させるべきものがない」状況に立ち至るのです。いわば自分の知識のなかを(c)ケンサクしても、該当するものが見あたらないといった状態です。そうした困難さが特別であるゆえんは、照合すべきものが「ある」という普通の状態に対して、「ない」というまったく別の状況が起きているからです。

(中略)

こうして考えてくると、何かを認識するとか、何かを感じるといったことは、果たして受動的なのかという疑問が浮かんできます。というのも、外からの情報がわたしのなかの知識と照らし合わされることによって初めて認識されるとしたら、明らかに、そこには「わたし」の参与があるからです。わたしと切り離された、純然たる客観的な「事実」の存在など危うくなります。

もっとつきつめると、(3)感覚さえ知識に誘導されているとしたら、わたしたちはありのままの世界を見ていないことにもなります。赤い球体を見て、わたしたちはすぐにそれをリングだと判断するでしょう。しかし、セザンヌ Paul Cézanne (一八三九―一九〇六) が描きたかったのは、わたしたちが習慣的な判断や「決めつけ」をもちこんでいない、ありのままのリングだったかもしれません。それは必ずしも赤くないし、純粹な球体でないかもしれないのです。知識によって、わたしたちは物を明確に見ることができるとして、そこには必ず現実とはそぐわないものが入り込んでいるはず。というのも、知識とは一般へと抽象化された概念であるのに対し、現実はいくまでも個別だからです。これはカントのいう「物自体」へ到達できない人間の宿命にほかなりません。

しかしここで観念論を展開する必要はありません。「シートベルト」を「シートベルト」と読み間違えた人にはある傾向が見られるはず。少なくとも、その人たちは車に関心があるはず。車に無関心な音楽好きの人が、そう間違えるはずはないでしょう。つまり、この読み間違いは、認識においてわたしが参与することの決定的な現れであり、その「わたし」とは抽象的な人間一般などではなく、まさにこの「わたし」、つまり車に興味があるとか、「シートベルトを締めなさい」などといつもいわれている「わたし」にほかならないのです。認識とは、(4)ほかの誰でもない、この現在のわたしが投影される積極的な行為なのです。

(田村和紀夫『音楽とは何か―ミュージズの扉を開く七つの鍵―』より)

問1 ——— 線部(a)～(c)のカタカナを漢字に改めなさい。

問2 ——— 線部(1)「読み間違いは、「読んでいない」ことに起因することになります」とありますが、読み間違いはどのような行為から起きるのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 構成している文字を一文字ずつ認識する行為
- イ 視覚的に似ている言葉を確認する行為
- ウ 単語全体の「形」を見て判断する行為
- エ 外見上似た単語と混同しているかを推測する行為

問3 ——— 線部(2)「物の本質を表すギリシャ語の「イデア」は、「見る」を意味する動詞イデーネin(ein)に由来し、本来は「見られたもの」「形」を表すことが思い浮かびます」とありますが、この一文から言えることはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 言葉が持つ意味よりも言葉の外見を重要視することで、本質に近づくということ
- イ 目に入るものをとらえることこそが、本質を理解する行為の起点となるということ
- ウ 物事の本質を追求するためには、じっくりと「見る」行為が欠かせないということ
- エ 表面上の事象に目を奪われると、物事の本質を見失ってしまいがちだということ

問4 空欄 A・B に当てはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア A 「シューベルト」という語 B わたしのなかの「シューベルト」
- イ A 見た情報 B 知識
- ウ A 語の「形」 B 判断
- エ A まったく新しい情報 B 符合させるべきもの

問5 ——— 線部(3)「感覚さえ知識に誘導されるとしたら、わたしたちはありのままの世界を見ていないことにもなります」とありますが、このことについて次のように説明しました。次の空欄 I ～ IV に当てはまる語句を本文中から抜き出しなさい(句読点や「」などの記号も一字に数える)。

わたしたちは何かの事象をとらえる際、

I (12字)

としてそつく

りそのままとらえるのではなく、「わたし」を持ち込み、それと事象を
してとらえている。

II (2字)

ここで言う「わたし」は、そのときどきに発現する考えや感情というよりは、

III (9字)

が大いに影響を与えることにより形作られた、いわば

IV (13字)

とも呼べるものである。したがってわたしたちは、

世界をありのままに忠実にとらえてはいないということになる。

問6

——線部(4)「この現在のわたしが投影される積極的な行為」とありますが、それはどのような行為ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 目に入るままに対象物をとらえるのではなく、自身の感覚や判断を入り込ませる行為

イ 未知の情報に出会った際も、自身の知っていることとの類似性を見出そうとする行為

ウ だれに言われることなく、自身が外部からの情報をすすんで取り入れようとする行為

エ 事象を意味づけするため、自身が日頃より関心を持つものと意識的に結びつける行為

問7

本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア わたしたちは、何かを認識するとき、はじめに全体の形をとらえ、徐々に内奥に迫っていく。

イ 言葉の形を看取することこそが、言葉を「読む」ということだと定義づけられる。

ウ 誤認には、既知の情報に対する場合と未知の情報に対する場合というように二通りの誤認が存在する。

エ わたしたちは、認識の過程において、現実とはそぐわないものを取り込んでいく。

2

次の文章を①～③の条件にしたがって、八十字以上百字以内で要約しなさい。

- ① 三文で要約すること
- ② 第二文の書き出しを「しかし」、第三文の書き出しを「つまり」で始めること
(……………。しかし……………。つまり……………)。
- ③ 解答欄の一マス目から書き始め、句読点も一字に数えること

全員一致とはどのような制度だろうか。

アメリカの刑事陪審員裁判は全員一致が原則であり、全員一致の評決に至らない場合には「評決不成立」となって、新たな陪審員が選ばれ、もう一度対審(トライアル)をやり直す。日本の内閣でも、閣議の議決は全員一致による。こと裁判や政治に限らず、みんなで話し合ってものごとを決める場合は、多数決ではなく全員一致こそが本来的なのぞましい。全員一致で決められたことはみんなが賛同した結果だと考えられるからだ。それぞれの考えが同じ方向を向いていて、きちんと納得のいく状況が作れるのならばこれに越したことはない。

しかし、はじめから全員一致でなければ決まらないということになっていると、とたんに反対意見を表明しにくくなる。反対意見がある以上、最終的な決定ができない。それどころか、あえて反対すれば議論に時間がかかって、他の人に迷惑がかかる。みんなの結束を乱したくないという感情が自主的な規制を呼び起こし、自己検閲をかける。そして「異論がないことは賛成を意味する」という間違った認識によって「右に同じ」とばかりに賛同者がいたずらに増えてしまうこともある。

たとえば文化祭の出し物をクラスで決める場面を考えてみよう。みんなでやるのだから、誰も反対しないものを選びたい。そこで、まずAさんが「お化け屋敷をやりたい」と言った。BさんもCさんも賛同した。そのとき、Dさんが「僕は屋台で焼きそばを売りたい」と言えば、当然、会議が長引く。そこでDさんは、自分の意見を主張することをあきらめて、「みんながやりたいものでいいよ」と言い始める。つまり、自分の意見を表明することはあえてしなかつたけれど、それを決める手続き自体には自分も参加した、という理屈だ。

こうして、話し合いは限りなく儀式に近づいていく。判断そのものは是非よりも、みんなの形式的な合意が重視されるのである。もちろん、多数派の人々で「これがいい」と思った選択が、好ましい結果をもたらす場合もないわけではない。それでも、話し合い当初の目的とは異なり、その場の雰囲気や集団的な思考が働き、個人の意志とは無関係に、全員が賛同したかのような意見の一致が作られていくというのは本末転倒ではないか。遠慮して言いたいことが言えなかつたり、多数派や声の大きい人に同調したりしていたのは、たくさんの意見を集める意味がなくなってしまうのである。

(本文は本校で作成した)

